

ヤンゴン素描 41

タームエ 斜陽の町

山形洋一

古い歴史を持ちながら、開発から取り残されてきた不運の町。タームエ駅が寂れたのは、鉄道を利用して低所得者層が締め出されたせいでもあろう。

「タームエ」という地名はモン語に由来し、「ター」は棕櫚に似た葉をもつオオギヤシ、別名サトウヤシのこと、「ムエ」は数字の1で、合わせて「一本椰子」の意味だという。インヤ湖が作られるまでこのあたりに広がっていた水郷風景を思わせる地名である。

インヤ湖（旧名ココイン湖、ビクトリア湖）は南北に連なるイラワディ層丘陵の鞍部を、東と西で堰き止めてできた、人工湖である。東の堤防のさらに東には谷が二本あり、北の谷の下手はカンベに至り、南の谷の下手はクニ・ピンラー（7本撚りの縄の意味？）・クリークでタームエ駅をかすめる。デルタ地形に位置するタームエ駅は、ヤンゴン環状鉄道38液の中でもっとも標高が低い。



低湿な場所の常として産業の静脈が通り、ヤンゴンの町が膨張し始めた20世紀の初頭、ここはゴミ捨て場や墓地として利用されていた。村上妙清著『入竺比丘尼』によると、タームエの日本人墓地への最初の埋葬は、日露戦後の1906（明治39）年だという。

だがその昔、1755年にアラウンパヤー王がヤンゴンの前身の「ダゴン」を攻めた時、先住民モン族はタームエに柵（Stockade、逆茂木）を設けて対抗したというから、当時それなりの集落があったはずで、クリーク沿いの水運で栄えていたのかもしれない。そうした邪魔（ヤン）を排除（コン）した記念として、町は「ヤンゴン」と改名された。タームエのすぐ東には、モン族僧侶を大量虐殺した時にできた袈裟（ティンガ）の山（ジュン）ができ、ティンガンジュンと名付けられた。

19世紀にはランマドーの南端にあった競馬場が、20世紀にチャイッカッサンに移されたために、タームエ駅から西への道がブロックされてしまった。その競馬場の跡地は体育教育研究所ができたが、クリークを渡った東のティンガンジュン町に新しく作られた Youth Training Centre に比べて影が薄い。さいきんではタームエ駅のまわりは高級住宅地が作られ、高い塀と鉄条網の内側にポーチつきの二階建てに住む住民は、鉄道とはおおよそ無縁な生活をしている。

タームエ駅の正面出口は公道に向かず、薄暗い茶店を向き、まるで悪意に満ちた歴史によっ



て封印されたように見える。線路を越える国道脇には斜陽館がいくつか残っている。いまやヤンゴン市民にとって「タームエ」

といえば、多くのバスが行き交う十字路をさし、その南約2キロにあるタームエ駅は、ほとんど忘れ去られている。